

三次神経内科クリニック 花の里

Vol. 6 2016. 春号

— ご挨拶 医療法人微風会・社会福祉法人慈照会 理事長 和泉 唯信 —

『変わってきた認知症の考え方』

新年度を迎えました。皆様いかがお過ごしでしょうか。

私が医師になった 20 年前は認知症のお薬はありませんでした。現在は 3 種類の飲み薬と 1 種類の貼り薬があります。全てなおす薬ではありませんが状態の改善が期待されます。それらのお薬は患者さま一人一人に対しての使い分けが大事です。この使いわけを決める際の考え方がだいぶ変わってきました。

1999 年に最初のお薬が発売された頃は記憶力の改善ということが強調され記憶テストをよくすることが薬として優れていると考えられていました。その後 2011 年に 3 種類の薬が販売されましたがその頃になると薬の有効性は何も記憶力の改善だけではなく、朗らかになったり家族とのコミュニケーションがよくなったりなどより幅広く考えられるようになってきました。記憶力の改善が必ずしもその人や家族の幸せにつながるものではないと認識されたのです。認知症についての考え方が進歩してそうなったと思っています。

家族および介護者の皆様には薬の効果を記憶力だけでなく別な部分でも良くなった点がないかを感じていただきますようお願いいたします。

— ご挨拶 医療法人微風会 三次神経内科クリニック花の里 院長 伊藤 聖 —

当院は広島県の指定を受け、2015 年 2 月 1 日より認知症疾患医療センター診療所型を開設いたしました。急速に進んでいく高齢化社会の中で、認知症を有する高齢者の数も増加の一途をたどっています。当地域も例外ではなく、私達も日々の臨床の中でその傾向を実感しております。備北地区においても、高齢者夫婦の二人暮らし世帯や高齢者の単身世帯、認知症の夫（もしくは妻）が認知症の配偶者を介護する認知世帯などが多く、認知症の方を地域で支えていく基盤を形成することが重要な課題となっています。当院は認知症の診療や介護に関して、地域の病院やかかりつけ医との緊密なネットワークを形成し、介護機関とも円滑な連携がとれるように活動してまいります。また、認知症に携わる医療関係者のみならず、地域の皆様にも認知症のことを知っていただけるように、研修会などを通して情報提供活動をしてまいります。認知症疾患医療センターは、認知症の診断・治療に関するお手伝いをさせて頂くことはもちろんですが、認知症のご本人もご家族も住み慣れた場所で安心して暮らしていただくことを目標として、スタッフ一同お手伝いをさせていただきます。お気軽にご相談いただけましたら幸いです。



各疾患と診断後の関わり方について



今回は早期受診時の心構えなどがテーマでしたので、今回は診断後の関わり方（対応）についてお話ししたいと思います。

皆さんは、物忘れが強くなる・出来ていたことが難しくなる・自信がなくなって消極的になる…等で様々な悩みや葛藤を抱えながら生活をしている人の想いに寄り添えますか？

“認知症ケアに正解はない”と言われていますが、結局のところ人と人との関わりに方程式はない！ということでしょう。「物忘れしてもいいんじゃない？」「あなたが出来ないことはやってあげるよ、大丈夫。」と言えることが出来たら良いですね。

普通の人が普通に認知症になっていきます。認知症だから特別なわけではない。同じことを何度も聞くのは、毎回初めてのことから。いつも探し物をするのは、見つけたいのに見つからないから必死なんです。楽しいことがあると嬉しいし、気に入らないと無愛想になる。嫌なことがあると不機嫌にもなります。そんな感情は認知症でなくても同じだとおもいませんか？どんなに病気が進行しても、その人らしさや持って生まれた個性・人間性・そして生きて来た人生そのものは失われることはありません。

認知症の人は何も解らないわけではありません。物の言い方・表現の仕方・行動の仕方などが上手く伝わらないので「何も考えずおかしな事ばかりする…」という発想になるのだと思います。実はそうではないのです。一生懸命考えようとしているし、何とか解決しようと四苦八苦しなながら解らないことと戦っているのです。でも、その方法が解らないから困っています。そんな時、あなたのちょっとした手助けや声掛けがあることで、本人の出来ることは多くなります。

認知症は今や国民病とも今世紀最大の病とも言われていますね。決して他人事ではありません。私達もいつ“介護する人・介護される人”になるかわからない現状に考えさせられることは沢山あるし、そんな対応の仕方に於いては関わる私達の資質も問われている様な気がします。

その為に大切なのは“ハート”だけではなく、認知症の正しい知識と理解が欠かせません。異なる病気の特徴を活かしたケアについて話したいと思います

今回は4大認知症（アルツハイマー型認知症・脳血管性認知症・レビー小体型認知症・前頭側頭葉型認知症）について簡単に説明させていただきます。

アルツハイマー型認知症 (AD)

一般的に最も多い認知症です。脳内に異質のタンパク質が蓄積して神経細胞の伝わりが悪くなることで起こります。記憶障害が中心的症状です。加齢も重要な原因となり

ますが、歳を取らないわけにはいきません。薬で治る病気ではなく徐々に進行していきます。しかし、人が罹る病気ですから人の力や支えて頑張れると思いませんか？

脳血管性認知症 (VaD)

脳梗塞・脳出血などの発作後に後遺症として起こります。ダメージを受けた場所や障害の程度によって症状が異なるので、出来ることと出来ないことが比較的是っきりしています。判断力・記憶は割と保たれ、生活継続可能なことが多いです。感情の起伏が激しい・些細なことで泣いたり興奮することがあります。また、麻痺などで ADL が低下したり、言語障害がある場合は上手くコミュニケーションできず、イライラしたり気分が不安定になる場合もあります。

レビー小体型認知症 (DLB)


幻覚・妄想及びパーキンソンに似た症状が出現します。脳内にレビー小体という物質が蓄積することが原因です。実際にはない物が見える為に、本人は気味悪がったり怖がったりするので、周囲も混乱します。時間や日によって出現する症状が異なるのも特徴です。

前頭側頭葉型認知症 (FTD)

脳の前頭・側頭に萎縮が起こることで症状が出現します。特に前頭部は感情をコントロールしたり、私たちが社会生活を営む上で欠かせないルールを守ったりする場所です。本人のこだわりや独特な習癖など、簡単には記述できない程沢山の症状があります。ただ、記憶は比較的保たれている場合が多く、道に迷うことも少ないです。また、馴染みの関係が築きやすいということがあります。一旦仲良くなると他の認知症よりも関わりやすくなります。

次回からは各疾患のケアなどについて詳しくお話できる予定です。



三次神経内科クリニック花の里
主任看護師 武内 寿磨子 

認知症相談専用電話窓口を設置しております

【時間】 9:00~12:00・14:00~17:00

(月~土 祝日・休診日を除く)

【電話】 0120-870-318 (相談窓口専用電話)



認知症研修会を
実施しました！



2016年1月21日（木）にみよしまちづくりセンターにて認知症研修会を開催いたしました。研修会では、広島市立安佐市民病院 脳神経内科 主任部長 山下 拓史先生を講師にお迎えし、『わかりやすい認知症ケアと地域連携～認知症高齢者への日常の接し方～』と題し、ケアと地域連携について様々なお話をご講演頂きました。

認知症ケアについては、「物とられ妄想」「徘徊」などの対応の方法や症状を中核症状が中心なのか、BPSDが中心なのかを把握し、それぞれに合ったケア・接し方をするとのお話が印象的でした。また、オレンジパスポートを使った連携についても詳しくお話しくささいました。

当日は、多くの関係機関・地域の方々が参加してくださいました。今後も皆様にとって有用な情報が提供できるよう、定期的に認知症研修会を実施してまいります。その際は、ぜひご参加ください。

認知症医療連携
協議会を
開催しました！

#2016年1月21日（木）みよしまちづくりセンター講演会と同じくして、三次・庄原地区認知症医療連携協議会を開催しました。市、社会福祉協議会、包括支援センター、医師の方々などの委員の皆様にお集まりいただき、認知症カフェなどの各地域での取り組みについて情報共有をおこないました。

#2016年3月24日（木）三次市福祉保健センター
この回は、委員の皆様と事例検討を実施しました。主介護者の方、その他の家族の方、離れて暮らしている家族の方など、本人を取り巻く様々な方に、医療・福祉・行政など各立場としてどのようなアプローチができるのかなどの検討をおこないました。今後も定期的に協議会を開催し、情報共有及び意見交換を実施してまいります。



医療法人微風会
三次神経内科クリニック花の里
〒：728-0013
広島県三次市十日市東 4-3-10
TEL：(0824) 63-0330
FAX：(0824) 63-0331